

伝統行事と地域住民：「さいのかみ」づくりの参与観察から

TANAKA, Tsutomu / 田中, 勉

(出版者 / Publisher)

法政大学人間環境学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

人間環境論集 / 人間環境論集

(巻 / Volume)

14

(号 / Number)

3

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

12

(発行年 / Year)

2014-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00009841>

伝統行事と地域住民

— 「さいのかみ」づくりの参与観察から —

田中 勉

1. はじめに

本稿は「過疎と高齢化」と形容される山間地の農業集落における「冬まつり」に2012～14年の3回にわたり祭りの準備作業から関わった参与観察の記録と考察である。

この祭りは、新潟県上越市吉川区川谷（かわだに）地区で近年は1月の第2日曜日に開催されているが、古くから「さいのかみ」行事¹⁾として行われてきたものである。旧暦1月15日の「小正月」に行われてきたが、集落外からも参加しやすいように1月の第2日曜日に開催することが近年の恒例となっている。まつりは、①前日の準備作業、②当日の準備作業、③会食と雪上ゲーム大会、④「さいのかみ」点火、の4つの部分から成っている。筆者は地区外からの準備作業の手伝いおよび祭りの来賓という立場で参加した²⁾。3回とも天候は異なっていたが、積雪1mを超える中で各年とも同じ順序で行われ、地域の住民に交じり作業する中で多くの知見を得ることができた。以下、2014年度の観察と聞き取りを中心に、この祭りの地域住民にとっての意味を考えてみよう。

この地域は日本海からの雪風が最初に山地にぶつかるところで、標高200～300mの緩・急傾斜地に点在する棚田での米づくりはまさに条件不利地域での農業であり、過疎と高齢化そして後継者難と日本の農業の一典型をなす現状にある。水稲単作の地域で、畑での野菜栽培は自家用程度である。

まずは、地域の人口・世帯の変化を簡単に見ておこう。川谷地区は昭和30年の合併により吉川町となるまでは「源（みなもと）村」に属していた、川谷地区は

上川谷・下川谷・石谷・名木山の4町内会（集落）から成っている。表1からは、昭和30年代には600人を超えていた人口が、今では60人にも満たず、世帯数も4分の1ほどになっていることがわかる。とりわけ、1965～75年の減少が目立ち、人口は半分に世帯数も3分の2になっていることから若年者の進学・就職による「他出」増加に加えていわゆる「挙家離村」が生じたと見られる。

表1 川谷地区の人口・世帯数の推移（1955～2010年）

年次	人口	(指数*)	世帯数	(指数)	平均世帯員数
昭和 30(1955)	792	(100.0)	131	(100.0)	6.05人
40(65)	637	(80.4)	121	(92.4)	5.26
50(75)	299	(37.8)	87	(66.4)	3.44
60(85)	169	(21.3)	56	(42.7)	3.02
平成 20(2008)	61	(7.7)	31	(23.7)	1.97
22(10)	57	(7.2)	31	(23.7)	1.83

(* 指数は昭和30年を100としたもの)

資料出所：吉川町史、広報吉川、上越市人口統計資料

聞き取りでは、「米の生産調整（減反）がひびいた」と述べる住民が多かった。人々の記憶の中でもこの時期に地域社会が大きく変わっている。急傾斜地であったり用水確保が容易でない圃場から減反の対象になり（米づくりをあきらめたといってもよいだろう）、この施策の開始を機に転出する世帯が増えたことがうかがえる。

平均世帯員数も1960年代には6人を超えていたのが現在は2人を下回り、ほとんどが夫婦のみあるいは一人暮らしの世帯となっている。

住民基本台帳によると2013年の人口は56人、世帯数は30である。その年齢構成を表2で示す。地区の実態を示すために年齢の区分は少し変則的である。通常行われているように、65歳以上を「高齢者」と見なしてその割合を「高齢者比率」とするならば69.6%となり、超高齢化などという言葉では追いつかないほどのものとなる。75歳以上をとっても4割を超えている。

表2 川谷地区人口の年齢構成

年齢	20歳未満	20～49歳	50～69歳	70～79歳	80歳以上
人数	3	6	14	15	18

資料出所：上越市人口統計資料

2. 前日の作業

「冬まつり」の会場は、閉校になった川谷小学校³⁾である。「さいのかみ」が立てられるのは旧校庭の広場である、もちろんこの時期は深さ1mほどの雪原となっている。かつては集落ごとに実施される行事であり、各集落内の田に立てられていたが、昭和40年代に4集落が合同で開催するようになったという。

主催者は「みなもと地域づくり会議 川谷部会」⁴⁾であり、祭り全体の運営責任者は部会長である。また、「さいのかみ」作り作業のリーダーが置かれる。

祭り前日の作業は、午後1時30分開始である。旧小学校の体育館（現在は、吉川地区公民館川谷分館となっている）に集合、作業リーダーを中心に簡単な打ち合わせが行われる。どこの木を切るか、どこから竹をとってくるか、人数をどう割り振るか、などごく簡単な打ち合わせで終わり、作業に取りかかる。まずは、「さいのかみ」の芯となる木の伐採を行う。「ゴシンボク」と呼ばれているから「御神木」のことであろう。会場になるべく近い場所の木があらかじめ決められており、所有者に事前に了解を取っている⁵⁾。2014年は会場近くの県道脇の雑木を切った。樹高10mを超えるもの3本をチェーンソーで伐採、除雪に用いられているブルドーザーで校庭まで引いてくる。人力では移動できないくらいの大きさと重さがある。一方、竹は15m近くある大きさの孟宗竹を6～7本伐り、葉をつけたままこちらは軽トラで引いてくる。

校庭の半分ほどは作業がしやすいようにあらかじめブルドーザーで圧雪してあり、その中心に芯となる木を立てる、引いてきた木の中から太さや曲がり方を考慮して、直径20cmほどの位置で切断し、7mくらいの「ゴシンボク」とする、スコップで掘った雪穴にそれを立て、周りの雪を足で踏み固めて安定させる。次に、12mほどの竹を6本、葉をつけたままゴシンボクから数10cm離して環状に立てていく、こうしてゴシンボクを中心にして尖塔状の形が見えてくる。当然竹には曲がりがあるので、できるだけ尖塔の形がシャープになるよう立てる位置や方向を調整する。この間だれが先導するということなく、作業はスムーズに進行していく、「もう少し竹を右に廻した方がいい」などと声を掛け合いながら形を整えていく。芯木を中心に斜めに竹が立て掛けられると、尖塔というか円錐状の骨格を維持するために木と竹をぐるりと取り巻くように縄や藤蔓が廻される。ハシゴがかけられ、70歳を超える人が身軽に縄を廻し縛っていく。慣れた手つきであるが、周りからは「ハシゴをも一段上がれ」「落ちないように力加減して綱を締

めろ」といった声が飛ぶ。芯木と竹を固定すると、第一日目の「さいのかみ」作りの作業は終わりである。作業を始めて2時間ほどである、骨格づくり以上の作業をしないのは、夜間に積雪があると重みで倒れてしまうことがあるので用心のためということだった。(写真1)



写真1

体育館（公民館）に引き返し、翌日の雪上ゲームで使う「くす玉」を作ったり、賞品の点検を行ったりする。その脇で、床にひろげた4mほどの長さにつなげた模造紙に「平成26年 祝 冬まつり」というノボリを鮮やかな筆さばきで書き上げているのは女性である。書きながら「第〇回と書こうか」と言うが、何回目の祭りなのか誰も正確にはわからない、誰かが「100回とでもしておいたら」と冗談を言う。そのやりとりにはこれが長く続いてきた行事であるという自負が見て取れる。回数などは問題でないとも言える。⁶⁾

3. 当日の作業

祭りの当日は朝8時から作業開始。前日に立てた「さいのかみ」の骨格に肉付けする作業である。「ゴシンボク」と一緒に伐りだしておいた木を長さ5～6mにカットし、枝に切れ込みをつけ幹に並行になるように抑えつけながら、稲藁を巻きつけたり枝の間に押し込んだりして、「きりたんぼ」状に仕上げていく（これには特に名称は与えられていないようであった）。これを6本作り、竹と竹の間に押し込むように斜めに立て掛けていくのだが、木にロープを結び雪の穴に根元を差し込み、数人がかりで引き上げ、斜めになるよう位置を調整し縄で骨組みに巻き付けていく。この斜めの部分の形いかんで、きれいな尖塔の形になるかが

決まるので、何度も位置を確認する。あとで燃やしてしまうにもかかわらず、見た目が美しいように仕上げているという意は共有され、何度も手直しがなされる。ハシゴを登って縄を巻きつけ固定する者、ハシゴを支える者、安全に作業するよう互いに声を掛け合って進んでいく。このように平行してさまざまな作業が行われているのだが、皆それぞれが動き回り、時々かけ声を掛ける人はいるが、整然と作業が進んでいく。慣れた作業ぶりである。チェーンソーや鉋で木を切る、ロープを後ではずしやすいうように結わえる、縄を解けないようしっかり結びつける、いずれも平常の農作業で培われた技能である。手伝いとして参加した若者たちは持ち合わせていない生活の中での知恵と手作業である。縄が足りなくなるとすばやく稲藁を取り、縋いあげていくことは経験豊富な農家の人には手慣れたものであるが、すでに継承されなくなったものであるようだ。縄は買ってくるものになっている。

ハシゴを伸ばしその最上段（5mくらいのところ）に70歳前後のオジサンやオジイサンが立って、片手で竹や木につかまりながらもう片手では縄を掴んで骨組みの周りにまわし、縛り付けていく。見ているだけでハラハラするような作業だが「だんだんこれがキツくなってきた」などと言いながらも手際よく縄を結ぶ。

徐々に完成形に近づいていくが、円錐形が強調されるように、根元に萱を斜めに立て掛け、稲藁を押し込んでいく。この時、門松など正月飾りがその中に入れられるが数は多くない。最後に縄を廻して全体の形が崩れないよう固定する。萱と稲藁はこのために収穫後各農家で乾燥させ保管していたものである。現在は稲刈りもコンバインで行われ、稲の茎は刈り取りと同時に細かく裁断され、田んぼに播かれる。稲藁はすでに利用価値のないものになっており、この日のためにわざわざ機械を調整して、長いままの稲藁を確保しておくのだそうだ。

その横では、稲藁をつなぎ合わせて太い縄を縋っていく、数十センチの藁を使って巧みに長い縄を縋っていくのを、学生たちは教えてもらうのだがそうは簡単にできない。この大縄は、さいのかみの「腰」の部分にまるで相撲の「横綱」のように巻きつける。これでぐっと美しい姿になる。「さいのかみ」の本体「ホンヤ」の完成である。

このころになると、2~3人が10mほど離れた場所に2.5mほどの高さのもうひとつの小さな円錐形を作り始める。こちらは細い枝で骨格を作りと稲藁を積み上げたもので、「センチゴヤ」⁷⁾という名称で呼ばれている。「ホンヤ」と「センチ」大小ふたつの尖塔のセットから成る「さいのかみ」である。こうして準備

作業が終わったのは午前11時ころであった。高さ12m、最下部の直径が5mほどの「ホンヤ」であるが、これほど巨大なものは他の地区ではもう作られなくなっているようである。上越市に合併した後、市長がこの地区の冬まつりに参加したのは、最も伝統的な形での行事が過疎と高齢化が進んだ市内でも有数の豪雪地帯の川谷地区で行われていることが評価されたためであると受け止められている。吉川区の中でも、「さいのかみ」行事自体が行われなくなってきた地区が多いとのことである。

興味深いことは、すべての作業を通じてブルドーザーとチェーンソーを除くと機械力は用いられず、人力によってなされるということである。また、材料はすべて自然物であって、燃やしても有害ガスなどとは無縁である。すなわち、その作法は普通りであることだ。

4. まつり

11時過ぎ、体育館の中で会食が始まる。約50名が地区の内外から集まっている。まずは来賓の紹介とあいさつである、来賓は行政（区総合事務所）幹部、市議、JA支店長、郵便局長、駐在所の警察官、およびこの地区と交流する団体の関係者などである。主催者挨拶の後、来賓の代表者が祝辞を述べ乾杯となる。「誰々さんの漬け物です、廻してください」などと声がかかり、宴会の開始となる。宴席の中央には臼が据えられており、餅つきが始まる。臼の周りに3人が立ち、交互に杵を振り上げスピーディかつリズムカクに搗いていく。3人で交互に杵を振り下ろし、こね取り役はいない独特の搗きかたである。70歳代の人々が軽々とひと臼搗き終わる。このもちはずぐに雑煮に入れられ、さっそく日本酒と共に体を温める。搗き手が替わり、住民以外の参加者も慣れない手つきで3人搗きに挑戦するがリズムが取れずに、杵同士がぶつかり悪戦苦闘する、これが宴席の余興ともなる。ひとしきり飲食と歓談



写真2

で時を過ごす、外へ出て雪上ゲームが開始される。雪の中ならでのゲームで、2チームに分かれ時間内にどちらが高く雪の山を積み上げられるか、くす玉わりも雪合戦の要領である。数少ない子どもたちが歓声を上げ、大人たちもゲームに興じ、賞品をもらってまた笑い声が起きる。にぎやかな声が雪の原に響き、1時間ほどが過ぎる。

2時過ぎ、完成した「さいのかみ」をバック参加者全員の集合写真の撮影が行われる。(写真2)その後、いよいよ「点火」となる。まずは、「センチ」に火がつけられる、その年の年男年女が「ホンヤ」への点火を担当する。2014年度は地区の女性2人と東京から来た女子学生2名が年女であったので点火役となった。かつてはこの役割は年男の男児の担当であった。男児が「センチ」の火を「ホンヤ」に移そうとすると、大人たちがそれを邪魔する。子どもと大人の「タタカイ」と言っていたそうである。長いときはこれが1時間も続きいたそうで、点火の時には日が暮れ、夜空を染めて燃え上がる火祭りであったと語り継がれている⁸⁾。この「タタカイ」にどのような意味があるのかは誰に聞いてもはっきりしない。ただ「そうしていた」というだけである。現在の点火役は男女を問わず大人であれ子どもであれその干支生まれであればいい、さらには住民に限定されてもいない、地域の現状に適応した形態となっている。

年女たちが稲藁を束にして「センチ」から火を取り、それを「ホンヤ」の下部につけて廻る。すぐに勢よく燃え始める、書き初めの習字にあつという間に火がつき、「祝 冬まつり」とかかれた大きな紙も火勢にあおられ舞い上がりながら燃え落ちる、まわりは一面の雪、延焼の心配もない。時おり竹の破裂する「パーン」「ドン」という音が聞こえる。ホンヤの最頂部めがけ大きく炎が上がり、煙が噴き上がる。「さいのかみ」行事にはさまざま伝承があると言われるが、ここではそれほど強く意識されてはいないようだ、それでも「煙の向かう方角の田んぼが豊作になる」という言い伝えがあったことを教えてもらった。書き初めを燃やすと字が上手になる、スルメをあぶって食べると病気をしない、誰彼と無くススを顔に塗ってよい、



写真3

などは引き継がれている。豊作と無病息災を願う行事である「さいのかみ」の神事としての側面が残ってはいるものの、その色彩は薄いと言ってよいだろう。

点火して30分もたたないうちに燃え尽きる。燃え残るのは芯木ほかわずかで、すっかり燃え落ちてしまう、萱と稲藁の火力の強さを思い知らされる。参加者たちも三々五々引揚げ、祭りはお開きとなった。午後3時を過ぎたころであった。(写真3)

5. 祭りの機能と意味づけ

この地域における「冬まつり（さいの神行事）」の機能とそれに関わる人々の意味づけについて考えてみよう。このイベントの持つ意味は何だろう、祭りに特別な意味はなくてもよい、単に楽しみ・娯楽である考えてもよいが、行事が継続されていく背景をこの地区の文脈に沿って理解する試みも可能であろう。次の二点から考えてみる。

第一は、この祭りが雪の季節に行われるということである。この地区では3mの積雪はごく普通のことである。12月から3月まで雪が降り続く⁹⁾。連日の「雪掘り」（ここでは雪かきや雪下ろしではない、文字通り雪の中から家を掘り出す）が冬期の生活には欠かせない。現在では公道は行政による除雪が行われるが、家屋や農業施設はそれぞれの家ごとの作業となる。高齢者にとっては重労働である。1月上旬の冬まつりのころは、まだ1mを超えるくらいであるが、大寒を過ぎ2月には積雪が最高になる。除雪は休むことはできない、屋根の雪と軒下の雪がつながると危険であるし、日中も暗い室内で過ごす生活となってしまう。このような毎日が続く中、さいのかみ行事はまさに「ハレ」の日である。新年を迎え、これから本格化する雪の季節へ向かっての日常の中で一日地域の人々が集い飲食を共にし、おしゃべりにゲームに興じることはひとつの区切りとなっていると言えよう。

第二に、この「ハレ」の行事が毎年同じやり方でいわば「日常的」なものとして繰り返されるということに注目してみよう。矛盾した表現かも知れないが「非日常的な祭りがこれまでと同じく（日常のここのように）繰り返えされる」ことの持つ意味はこの地域にとって重要なことである。このことに気づかされたのは、「さいのかみ」作りの作業が行われる中で、ある女性に「お父さんたちは、毎年『歳をとって大変になったから今年は小さいのにする』と言っておきながら、作り始めるといつものように大きくなる」と言葉は嘆きのようにありなが

ら、どこかうれしそうな口調で語りかけられた時であった。はじめに述べたようにここは極めて過疎化・高齢化の進行した地域である。農業に関わるさまざまな行事が担い手の不足で消滅していることはつとに言及されることであるが、¹⁰⁾ この地も例外ではなく「さいのかみ」が唯一存続している農業関連行事（豊作を祈る）といってよい。確かに、開催日や点火の作法など、現在の地域の状況に柔軟に適応した形に変化してきている。この適応的变化とは対照的に作業においての材料や方法に関しては昔からのやり方が継承されてきている。

祭りの準備作業をする主体は70歳代である、若手が手伝うにしても作業をリードしているのは高齢の人々である。にもかかわらず、区内で最も巨大な「さいのかみ」を作りあげる。大きさ立派さにおいてはどこのものにも引けをとらないと言わんばかりである

また、「さいのかみ」作りにかかる時間は5～6時間にも及ぶ、点火後30分もしない内に燃え尽きてしまうのに。危険を伴う作業の大変さに比べ、あっけないほどの時間で巨大な構造物が火と煙と燃え残りになってしまう。この「さいのかみ」作りは、音を立てて燃え上がるこの一点に向かっての「非生産的」な労働（遊びの要素も含んだ）と言えるかも知れない。

昨年一昨年と同様に作業が行われたという点に意味があるのではないだろうか。毎年、歳を重ね作業はだんだんきつくなる、だがそれでもこれまで通りの祭りが行えた、そのことが重要なのではないだろうか。「川谷地区がかつては区内のほかの集落に比べても人口が多く、米の生産高も多く、棚田の米は清冽な水と昼夜の気温差で味がよい」と語る人が多い。ここが有力な地域であったことの「土地の記憶」を持つ人々にとって、過疎と高齢化の進んだ中であって昔と変わらぬ行事を今年もまた行えることは、自らの存立の意義を確認する行為となっていると言えよう。言い換えれば、地域の誇りを再確認する行事である。変わらず祭りが行われたということ自体が大いなる意味を持つと言える。¹¹⁾ 例年と同じにできたということは、今年の米作りに向かう体力と気力がある証しであり、自己概念としての「百姓」を強化し保持していく基盤となるものである。だが、臍を決して、悲壮な覚悟で継続されているのではない。理屈抜きに楽しい行事である。協働作業は楽しいし、あとの酒席はなおうれしい。より美しく立派な「さいのかみ」を建てた満足感、火祭りの高揚感、そしてひとびとの笑顔、「自分たちの暮らしを肯定する気分」¹²⁾ に満ちている。このような「さいのかみ」行事の重層的な性格のそれぞれに目を向け地域社会のコンテキストに沿って理解してい

くことの必要性を強調しておきたい。

「さいのかみ」行事の準備から参加し、「なぜこれだけのエネルギーを注ぎ込んでこの行事が継続されているのだろう」、誤解を恐れずに言えば「過剰とも言える熱意の源はどこにあるのだろう」という関心のもとに、観察と聞き取りを行ってきた。多くの事実確認と考察すべき課題が残されているが、「さいのかみ」行事がこの地域に住む人々にとって年中行事のひとつという以上の意義と意味を有していることは明らかであろう。

謝辞：この機会を与えてくださり、部外者の勝手な関心に応えてくださった地域の皆さまに心からの御礼を申し上げます。

註

- 1) 「さいのかみ」は「左義長」または「どんと（とんど）焼き」などと呼ばれて全国的に広くみられる。地方によって呼び方が異なるが、旧暦1月15日（小正月）に行われる火祭りである。民俗学的には、門松やしめ飾りによって出迎えた歳神（としがみ）を、それらを焼くことによって炎と共に見送る意味があるとされるが、鎌倉時代にはすでに行われていたと言われるくらい古くから続く農村行事である。新年の行事であることから「歳の神」が適切であるようにも思えるが、「災いがムラに入ってくることを防ぐ」ということから「塞の神」や「災の神」とも考えられる。また、「賽の神」「斉の神」「幸の神」などの字があてられることもある。川谷地区では「さいのかみ」と表記されている。昔からそうであったかは定かでない。本稿での関心はこの行事の民俗学的考察にあるのではないから、どの意味で用いられているのかは問わずにおく。
- 2) 筆者はこの地域で2001年以来、棚田での米づくり体験を学生・卒業生とともにに行っている。現在は「夏祭り」や「雪掘りボラティア」など四季を通じて地元関係者と交流を続けている。
- 3) この4つの集落（町内会）は同じ小学校区に属していた。川谷小学校の児童数は1965年には139名であったが、閉校になった1984年には6名であった。（「吉川町史」）
- 4) 橋本（1996）は、農村におけるさまざまな組織の重層的存在を指摘しているが、川谷地区においても町内会のほかにも組織体が重なり合っている、「地域づくり会議」は4つの町内会で構成されており、夏と冬の祭りなどを実施している。
- 5) 事前に所有者にことわっておけば、地区内の誰の所有地からでも自由に木や竹を伐採してもよいというのが慣行になっているとのことであった。
- 6) この行事の継続性については正確なことはわからない。「吉川町史」によれば「日中戦争

が始まると停止の指導があり、次第に行われなくなった」ということであるし、川谷地区でも人口減や冬期の出稼ぎなどで中止されていた時期があるということである。その再開については旧小学校の教師の働きかけがあったと語る人もいる。

- 7) 単に「コヤ」と呼んだり「雪隠小屋」の字があてられたりするが、意味はよくわからない。柳田国男監修の「民俗学辞典」の「左義長」の項に「サンチヨゴヤ」という火焚き行事の際作られる小屋を指す用語が見られる、何らかの関連があるかも知れない。
- 8) 堀内・山岸（2009）における聞き取り。
- 9) 上越市ホームページの「積雪情報」によると、2013年度の下川谷での初積雪は12月7日、年末の積雪は60cm、2014年2月中旬は2mである。それでも例年よりはかなり少ない。
- 10) 例えば、笠松（2010）「中山間地域の現状と将来展望」
- 11) 宮本常一が「現在、古い行事や習俗が急激になくなりつつある。そのことは山村においてもかわらない。（中略）そのほろび方に問題があるのではないかと思う。というのは現在我々が残しておきたいと考えているようなものは、その地域社会が動いていくための大きな軸となっていたものであることが多い」と述べたのは、1975年のことであった。川谷地区における「さいのかみ」行事はまさしく「大きな軸」となっていると言えよう。
- 12) 鳥越皓之ほか（2009）p242

参考文献

- 橋本文華（1998）「村落共同体における環境管理」、『環境社会学研究』4号、新曜社
- 堀内しげみ・山岸祐（2009）「かわたにあったか聞き書き記」法政米米クラブ
- 笠松浩樹（2010）「中山間地域の現状と将来展望」、寺西・石田編「農林水産業を見つめ直す」中央経済社
- 加藤友康ほか編（2009）「年中行事大辞典」吉川弘文館
- 小島美子ほか編（2009）「祭・芸能・行事大辞典」朝倉書店
- 宮本常一（1975）「山村の地域文化保存について」、宮本（2013）「山と日本人」八坂書房。
- 森岡清志編（2008）「地域の社会学」有斐閣
- 西角井正慶編（1958）「年中行事辞典」東京堂出版
- 関 礼子ほか（2009）「環境の社会学」有斐閣
- 鳥越皓之ほか（2009）「景観形成と地域コミュニティ」農山魚村文化協会
- 柳田国男監修（1951）「民俗学辞典」東京堂出版
- 吉川町史編さん委員会（1996）「吉川町史」全3巻、吉川町
- 上越市 市勢統計 <http://www.city.joetsu.niigata.jp>

